



(桜井・吉野山)

奈良・藤原京跡右京六条四坊・七条四坊

ふじわらきょう

- 1 所在地 奈良県橿原市四分町
- 2 調査期間 一九九五年(平7) 十一月～一九九六年三月
- 3 発掘機関 橿原市教育委員会
- 4 調査担当者 齊藤明彦・平岩欣太・萩原義彦
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代、七世紀末～八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

この調査は、大型店舗建設に伴う事前調査である。調査地は藤原京跡右京六・七条四坊に相当し、古代の幹線道路である下ツ道の東

側に隣接する地域であり、下ツ道と六条大路の交差点部分の検出が予想された。一九九二年に行なった右京五條四坊における下ツ道と五條間路の交差点部分の発掘調査では、下ツ道東側溝などから多量の土器や祭祀遺物が出土した。このた

め、今回も下ツ道関係の重要な遺構・遺物の出土が予想された。

調査は、西側の第一トレンチ(面積二〇〇〇㎡)、東側の第二トレンチ(二〇〇〇㎡)、六条大路南側溝を追認するための第三トレンチ(約五〇㎡)の三カ所について実施した。主な検出遺構は、六条大路、下ツ道、西四坊間路、掘立柱建物八棟、井戸六基、弥生時代中期の方形周溝墓三基などである。

六条大路は北・南の両側溝を検出した。北側溝は幅約一・五m深さ〇・二m、南側溝は幅約四m深さ一・三m、道路幅は溝心々間距離で約二・一m(路面幅約一・六m)を測る。南側溝内の土層堆積状態は、下層部分で砂の堆積が著しく、かなりの水量が下ツ道東側溝に流れ込んでいたようである。

下ツ道東側溝は、幅約八～一二m深さ約〇・八mを測り、北へ向かって流れる。路面幅は調査区外の西へ続くため不明である。土層の堆積状態は砂と粘土層の互層で、六条大路南側溝と同様にかんりの水量があつたようである。そのため西肩には数カ所で護岸が施されていた。また、六条大路と下ツ道とを接続する橋を検出した。橋脚として柱状の角材・丸材を南北方向に二列配置し、これを固定するために両側に杭を打ち込み、さらに二m前後の横材をその隙間に入れ補強し、橋脚内部の幅約一mの間には、流出を防ぐための拳大の石を敷き詰めていた。遺物としては、木簡二点、七世紀後半の土器、帯金具・金属製人形・鏡・刀子・釘・鉄鏃・銭貨(和同開珎、

隆平永宝、萬年通宝、貞觀永宝、神功開宝）・耳環などの金属製品、斎串・人形・横櫛・漆器（盤）・曲物などの木製品、仏画を墨書した板（挿図参照）、夾紵片、砥石、獸骨、土馬があげられる。

第二トレンチの東側で西四坊坊間路の西側溝を検出した。幅約一・二m深さ約〇・五mを測る。この溝から木簡一点が出土した。

掘立柱建物は、ほとんどが二間×四間の東西・南北棟である。井戸は、藤原京期と平安時代の二時期に分かれる。藤原京期は四本柱と横板の組合せによるもので、平安時代のもものは大・小の曲物を数段重ねたものと、縦板組みのものが出土した。

8 木簡の釈文・内容

下ッ道東側溝

(1) ・「☐謹上 請米伍升☐

・「☐波多力☐謹上☐九斗☐ (151)×(37)×5 039

(2) ・☐波多力☐

・☐ (50)×(13)×2 081

西四坊坊間路西側溝

(3) 「☐白米五升☐

93×14×3 032

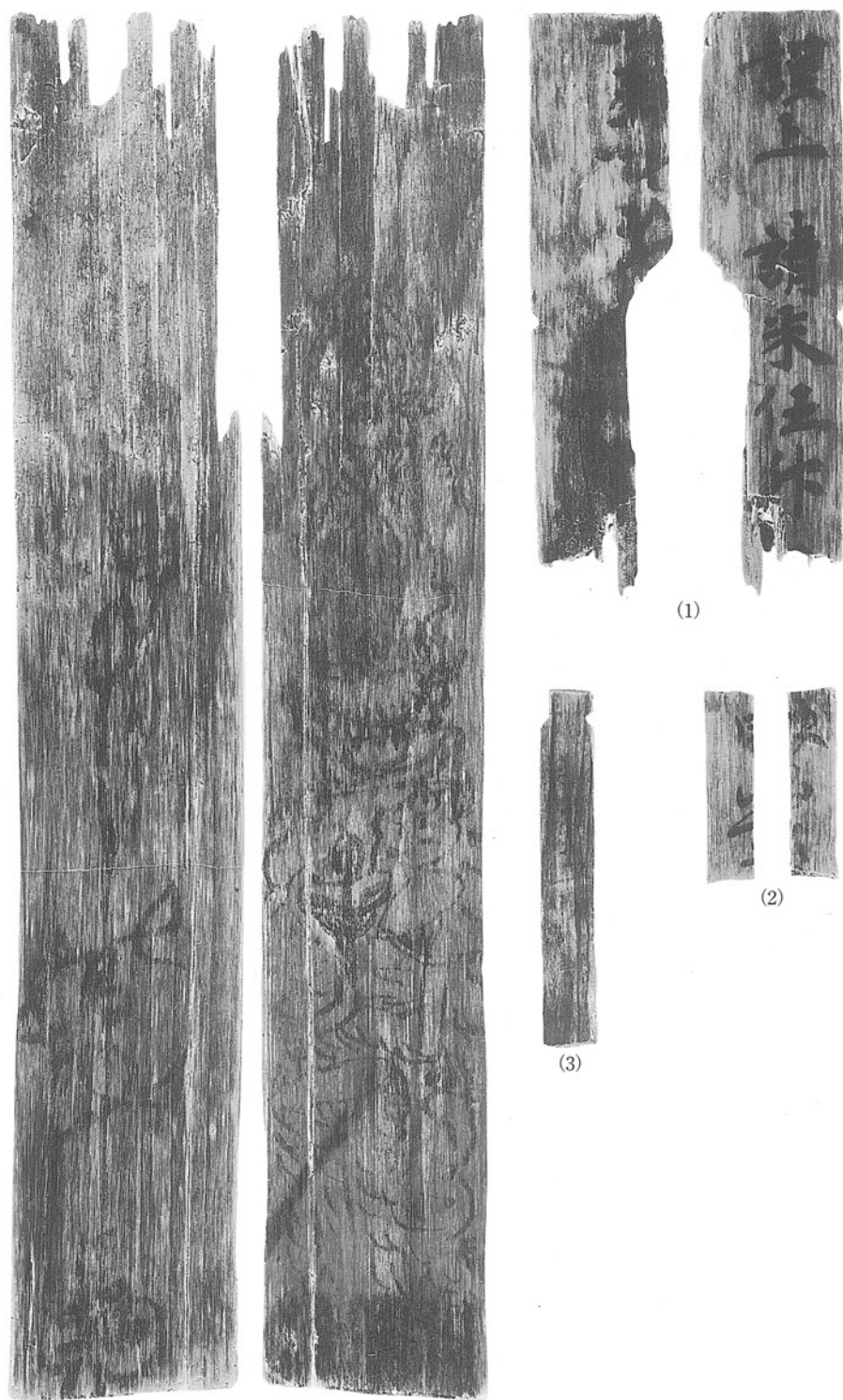
(1)は下端が折損し、左辺は割れている。切り込みは上端から約七cm下に浅く施されている。楷好なやや大ぶりの書体で書かれ、表裏で天地が逆になっている。書状形式の文書で使用される「謹上」「謹状」という語句が認められる。個人(某古丸)が差し出しとなつて、米五升を請求した際の文書木簡であろう。(2)は上端・下端ともに二次的に切断した痕跡があり、廃棄処分に伴うものである可能性がある。右辺は原形を保つが、左辺は割損する。(3)は切り込みの左上が欠損するが、ほぼ完形の荷札木簡である。白米の荷札は「五斗」単位が一般的であるが、この木簡は「五升」とみて間違いない。出土地点は異なるが、米五升を請求した(1)との関連が注目される。

(1)は請求文書であるが、米五升とともに差し出しに戻されたことは十分にありえよう。

9 関係文献

檀原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる』四(一九九六年)
檀原市教育委員会『藤原京右京六・七条四坊の調査』(平成八年
奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料、一九九七年)

(1) 7・9 齊藤明彦、8 市 大樹(奈良文化財研究所)



(参考) 仏画を墨書した板